

奈良・下茶屋遺跡

1 所在地 奈良県御所市下茶屋

2 調査期間 一九九三年(平5)六月～十二月

3 発掘機関 奈良県立橿原考古学研究所

4 調査担当者 坂 靖・福田さよ子

5 遺跡の種類 集落跡

6 遺跡の年代 縄文時代～中世

7 遺跡及び木簡出土遺構の概要



(五 條)

下茶屋遺跡は、御所市街地の南方約3km、金剛山の東麓に位置している。遺跡の北方約1kmには名柄遺跡が、南方約2kmには朝妻廃寺、南方約3kmには鴨神遺跡などの遺跡が所在する。さらに、下茶屋遺跡のすぐ西には、佐田遺跡・南郷遺跡という近年の大規模な営園場整備事業に伴う発掘調査で明らかになった遺跡がある。

佐田遺跡・南郷遺跡は、

いずれも古墳時代中期を中心とした集落遺跡で、多数の竪穴住居のほか、刀づくりに関わる工房、石垣を伴う大形建物や大壁住居などの遺構、韓式系土器・陶質土器などの遺物を検出しており、葛城氏及び渡来系集団との関連で注目される。

下茶屋遺跡の調査も、南郷・佐田遺跡と同様、県営の園場整備事業に伴うもので、試掘調査や事業計画に基づき、四カ所で本調査を実施した(第一～四地区)。調査面積は延べ約七五〇〇㎡に及ぶ。

このうち、木簡が出土したのは、第三地区と呼んでいる最も東に位置する調査区で、約三〇〇〇㎡の調査を行なった。

その結果、上層では弥生時代中期～中世の遺構・遺物、下層では縄文時代中期末～後期初頭の遺物を検出した。

木簡は、上層の飛鳥～奈良時代の川跡(SX〇一)から出土した。川は、西から東へ流れ、幅一五m、深さ〇・六mほどを測り、東西約五〇mの長さにわたって検出した。川の中からは、七世紀前半～八世紀初頭にかけての大量の土器、木簡が出土している。木器には、斎串・農具(鋤)・容器(曲物、刳物)・建材・紡織器などが含まれていた。ほかに、小形鵝尾・滑石製子持ち勾玉・銀製帯金具・桃核などの遺物も出土している。

特に、鵝尾は高さ八・四cmを測る超小形品だが、作りは精巧で、底部に半円形の刳り込みがあって、厨子にのせられていたものである可能性がある。

